

臼田甚五郎著

『口承文学大概』

武田正

第五章 鮎女房

むすびの章『フォークロア』の章

本会も創立二十周年。大きなうねりとして
口承文学研究の大道を歩んでいるが、本会第
二代会長臼田甚五郎氏の業績は計り知れない

ほど大きい。柳田国男、折口信夫、閔敬吾な
きあと、口承文学特に昔話、歌謡研究などに

関する臼田氏の牽引力に支えられて今日があ
ると言つても過言ではない。すでに氏の著作

集（全八巻）が出版され、それぞれの分野へ
の恩恵は言うをまたないのだが、ここに改め

て『口承文学大概』がまとめられて、研究者
に示唆することが多い。

最近の研究がますます深化すると同時に、
個別細分化し、ややもすればその全体像が見
失われがちな状況になつていることはいなめ
ない。それぞれの研究がどのような部位にあ
るかを知る上で、貴重な一石を投げられたと
言つてもよいだろう。

本書は二部構成になっている。その目次を
掲げておく。

序章 旅の章（ぱすぱう節他五篇）
第一章 猫と南瓜
第二章 鰐聾
第三章 鮎女房
第四章 鮎女房

第一部 口承文学大概
I 口承文学の性格
II 口承文学の意義
III 口承文学の発生
IV 口承文学の分化
V 民謡
VI 民謡の性格
VII 民謡の分類
VIII 説話の発生
IX 説話の文芸性／繰り返し表現／簡単
X 説話の文芸性／繰り返し表現／簡単
XI 説話の源流／言問い／言靈／言語活動
XII 説話の源流／言問い／言靈／言語活動の古代的状況／言語活動の中世的
状況
XIII 説話の誕生／万物万象の起源／諸家
の起源伝承／地方の起源伝承
XIV 見聞談の説話的エネルギー／説話の

解説（高木史人）

口承文学の研究に新生面を拓いてくれたの
は柳田であったのは周知の事実だが、柳田は
民俗学体系の一分野として、日本人の固有信
仰の片鱗が、神話から零落を繰り返して成立
したとされる昔話の中に見られるのではない
かと考え、昔話を溯及することで神話に、さ
らに固有信仰に到達できるのではないかと、
遠大な仮説を立てた。それを受けて臼田氏の

恩師折口信夫は「国文学の民俗学的研究を開
き、口承文学の研究に発生論的基盤をすえ
た」と指摘しているが、さらにそれを整序し
て、口承文学の発生と、その分化を辿り、そ
れを具体的に民謡と説話について見たのが第
一部である。

その中で注目されるのは、何と言つても
「言問ひ」における「われ」と「なんじ」の

関係が、相手の魂に反応をおこさせることであつて、「ことばをもって相手の魂に衝撃を与える、そういう意味で、相手の魂をう（打）つのだ」という指摘である。「うた（歌）ふ」とは「うつ」の継続的状態を表す、しかもその意を強化した活用なのであるといふ。そして「うつ」と同義の「か（搗）つ」の活用が「かた（語）る」なのだとする。このことはそのまま、口承文芸の伝承の「語り」の原義であり、衝撃を与える説話は「文学」として捉えるべきであるということにつながることにもなる。人が生活し、見聞きして言葉をもつてそれを伝達しようとするとき、説話は絶えず新しく復活し続けるだろうと、白田氏は説話に永遠の生命を見ようとしている。見聞きすることの中に、「どうしても語りたいもの」「語らざるを得ないもの」があり、それを語りたいというエネルギーこそ、説話の根源にあるものと見ているのである。

説話の持つ庶民のエネルギーを確かめる「旅」が始まる。第一部口承文学紀行がそれであり、無類に楽しい。と言うよりは白田理論よりはるかに多くのものを学ぶことができるものになつていると、私には見える。

『高木史人氏の解説によれば、『国文学』解釈と教材の研究』の昭和五三年一月から昭和五八年七月まで掲載された「民俗文学へのいざなひ」である。同誌に昭和四三年から連載されていた分は、『食はず女房その他』の『屁ひり女房その他』『天人女房その他』の三部作となり、『民俗文学へのいざなひ』鳥と蟹をめぐって』が加わってまとめており、本書の第二部はその後を繼ぐものだという。『思ひ返せば、『国文学』誌に「民俗文学の探訪」として連載が始まったとき、毎号興奮しながら読み、次号を待つのがもどかしかった記憶がよみがえってくる。それを頼りに昔話を重ねていた方々もきっと多かったのではないかとも思われる。すでに柳田の『日本昔話名集』があり、闕の『日本昔話集成』(全六巻)で、話型のモチーフが一応出そるつはいたが、地域により、語り手によりモチーフに差異が見られることを、白田氏の詳細な紹介で知り、その裾野の広さに感じ入ったものである。

しかし当時の調査研究は、柳田、闕を受けて、まず原型（オイコタイプ）を探し出すことであり、原型との差異はどこから来たのかを見ようとするに急で、西南日本と東北日本

の風土の差のせいにして納得しようし、あえて伝承・伝播の差異によつてモチーフの違いを理解しようとしていたと言つてもよかつたかも知れない。そして柳田の言う昔話が神話の零落したものと位置づけることで納得していたと言えるかも知れない。また昔話を民衆の一資料として捉え、昔話の中に信仰をさぐるという柳田の方法に追従する研究も、依然として多かつたことも確かである。また原形を求めるに急なあまり、「浦島太郎」の原形を『風土記』に見、それ以外のモチーフは後代に附加されたものといった論もないわけではなかつた。時、たまたま、民話劇『夕鶴』をはじめ『彦市ばなし』などが脚色されて上演されて人気を博し、民話という言葉をめぐつて柳田が木下順二氏にクレームをつけたこともあって、逆に昔話に限定を付けすぎて、狭い部分に閉じ込めて、よい語りとかよくない語りなどということに、うつつをぬかすことさえ見られた。

そういった流れの中で、白田氏の「旅」の中での民俗文学の考証はそれまでにない、生き生きとしたものであった。その地に足を運び、土地の風土、民俗の中で見聞きしたものと、さらに氏の精通した古典をも駆使して、昔話

のモチーフを分析し、その本質に迫る姿をそこに見たものである。だから時折は民俗文学の裾野の広さに私どもはまだ茫然と立ちつくして途方に暮れることもあったが、読み進むうちに、「ここに何かがある」といったことに気付かされ、意欲が湧いてくるのだった。その地を歩き語り手の語る言葉を実感として受け止めながら、それを柳田の言葉で、折口の言葉で、そして臼田氏自身の言葉で探って行く思考の方法を、私どもは今こそ学ばねばならないだろう。「猫と南瓜」「鱈聾」「鱈女房」「鮭女房」「鰯女房」はいずれもそれを見せてくれているが、ここでは「猫と南瓜」から、もう少し細かい貴重なものを、私なりに拾い上げてみたい。

「南瓜の黄色の大弁の花はなかなか見事で、あるけれども、思ふままに延びて空間を占めて行く茎と葉は、見方によつて恐ろしいエネルギーを感じさせる。しかも、その茎と葉に毛が生へてゐるのはたしかに薄氣味悪くさへある」と書き出されている。

と思うまことに延びて空間を占めて行く魔性とでもいうものを、そこに見ながら、それが「猫」という魔性のものと結びつくとき、文學作品が持つ衝撃性と同じものを、聞き手は

感得することに、まず臼田氏は注目する。まことに見たものである。だから時折は民俗文学の裾野の広さに私どもはまだ茫然と立ちつくして、やがて実がなるという不気味さが怖さを増幅する。蒔きもしなかった冬瓜が臼田氏の煙に生え、実がついたという経験を持ち、蔓をたどったところ実がついていたという挿話が入って、その冬瓜を手にしたとき、「猫と南瓜」の話を思い出したと、何気なく挿入する。さて、「猫と南瓜」を佐渡島を見、秋田・青森・岩手そして山形を見る。南瓜を食べて腹痛を起こし、または死んだ者は、時に薬売りであり、大工であり、船頭であつたりすることから、伝播は海とかかわる漂泊民かも知れないと考え、日本海側だけでなしに太平洋側にも所在を確認する。そして船頭と猫のかわりに出会い、三毛の牡猫を船にのせると難船しないという習俗を見ることから、葬礼の習俗の一つとして、猫を死人に近づけさせないと、天候がわるくなるという天気占いまで聽耳を立てる。そして南島の多良間島から豆のこと、「鱈聾」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚にが入って、その冬瓜を手にしたとき、「猫と南瓜」の話を思い出したと、何気なく挿入する。さて、「猫と南瓜」を佐渡島を見、秋田・青森・岩手そして山形を見る。南瓜を食べて腹痛を起こし、または死んだ者は、時に薬売りであり、大工であり、船頭であつたりすることから、伝播は海とかかわる漂泊民かも知れないと考え、日本海側だけでなしに太平洋側にも所在を確認する。そして船頭と猫のかわりに出会い、三毛の牡猫を船にのせると難船しないという習俗を見ることから、葬礼の習俗の一つとして、猫を死人に近づけさせないと、天候がわるくなるという天気占いまで聽耳を立てる。そして南島の多良間島から豆のこと、「鱈聾」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚にが入って、その冬瓜を手にしたとき、「猫と南瓜」の話を思い出したと、何気なく挿入する。さて、「猫と南瓜」を佐渡島を見、秋田・青森・岩手そして山形を見る。南瓜を食べて腹痛を起こし、または死んだ者は、時に薬売りであり、大工であり、船頭であつたりすることから、伝播は海とかかわる漂泊民かも知れないと考え、日本海側だけでなしに太平洋側にも所在を確認する。そして船頭と猫のかわりに出会い、三毛の牡猫を船にのせると難船しないという習俗を見ることから、葬礼の習俗の一つとして、猫を死人に近づけさせないと、天候がわるくなるという天気占いまで聽耳を立てる。そして南島の多良間島から豆のこと、「鱈聾」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚に

びつけ、「南の海の彼方から來たくされ縁」と記している。

次いでの「鱈聾」では民俗としての鱈と小豆のこと、「鱈女房」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚にが入って、その冬瓜を手にしたとき、「猫と南瓜」の話を思い出したと、何気なく挿入する。さて、「猫と南瓜」を佐渡島を見、秋田・青森・岩手そして山形を見る。南瓜を食べて腹痛を起こし、または死んだ者は、時に薬売りであり、大工であり、船頭であつたりすることから、伝播は海とかかわる漂泊民かも知れないと考え、日本海側だけでなしに太平洋側にも所在を確認する。そして船頭と猫のかわりに出会い、三毛の牡猫を船にのせると難船しないという習俗を見ることから、葬礼の習俗の一つとして、猫を死人に近づけさせないと、天候がわるくなるという天気占いまで聽耳を立てる。そして南島の多良間島から豆のこと、「鱈聾」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚にが入って、その冬瓜を手にしたとき、「猫と南瓜」の話を思い出したと、何気なく挿入する。さて、「猫と南瓜」を佐渡島を見、秋田・青森・岩手そして山形を見る。南瓜を食べて腹痛を起こし、または死んだ者は、時に薬売りであり、大工であり、船頭であつたりすることから、伝播は海とかかわる漂泊民かも知れないと考え、日本海側だけでなしに太平洋側にも所在を確認する。そして船頭と猫のかわりに出会い、三毛の牡猫を船にのせると難船しないという習俗を見ることから、葬礼の習俗の一つとして、猫を死人に近づけさせないと、天候がわるくなるという天気占いまで聽耳を立てる。そして南島の多良間島から豆のこと、「鱈聾」「鮭女房」では縄文の昔からの人々とのかかわりから、鮭の大助譚に